

〈研究ノート〉

マルクスのブリュッセルからのパリへの追放

— 2月革命とマルクス —

的 場 昭 弘

目 次

はじめに

1. マルクスの逮捕, 追放への過程
 - a. 2月革命とベルギー政府の反応
 - b. 革命と民主協会
 - c. マルクス逮捕と追放
2. パリへの追放
 - a. パリへの到着
 - b. マルクスのベルギー政府批判
 - c. その後の処理と政府の監視

結語

はじめに

1845年にパリから追放され、ブリュッセルに落ち着いたマルクス⁽¹⁾は、その3年後再びブリュッセルから追放され、パリへ戻ることになる。3年間のブリュッセルでのマルクスは、それまでと違いかなり積極的にドイツ人労働者の政治結社と関係を結ぶ。さらに、この時期は経済学の研究に従事し、思想的にも一層の充実を見せる時期でもある。

さて1848年2月革命を契機としたマルクスの行動と彼の逮捕, 追放, さらにパリでの行動に関しては、現在の所充分理解が得られているわけではない。マルクスの逮捕, さらに追放の際に問題になったという武器の所有, さらに武器の購入による蜂起への準備計画といったできごと(実際の追放理由は、危険な外国人を国外退去させるということ, 逮捕理由は滞在証明書の不備, また謀議の現行犯であり、かなり混乱していた), まずその信憑性のみならず、マルクスに何を求めるべきかという後年の解釈でねじ曲げられてさえいるからである⁽²⁾。

そのことは共産主義者同盟におけるマルクスの地位、『共産党宣言』の成立史, マルクスと2月革命における彼の役割についてまで及び、マルクス像を歪める理由にもなっている。革命家としてのマルクスを高く評価するならば、政治結社での彼の指導性, 革命の謀議への彼の参加についても積極的に評価したくなるのは当然であろう。

しかし、本稿での分析は、実はそうしたマルクス像に真っ向から対立することになるかもしれない。なぜなら2月革命前後のマルクスへの当局の監視は、それほど強いものではないし、マルクスへの武器購入嫌疑も、あくまで嫌疑であって、彼の行動と関係してはいないと思われるからである。マルクスは2月革命において暴力的な蜂起や革命路線にきわめて批判的であり、その後のパリ, ケルンまでの行動においても大筋においてずっとそうであった。またそう考える方が彼の当時の行動について筋が通るのである。本稿は、その点をマルクスのブリュッセルでの逮捕, 追放に関連して分析することにする。

1. マルクスの逮捕, 追放への過程

a. 2月革命とベルギー政府の反応

1848年2月革命の知らせがベルギーに届いた時、ベルギー政府は緊急措置の必要に迫られる。ベルギー政府は、ベルギー国王レオポルド1世(Leopold)(1790-1865)が、フランス国王ルイ・フィリップ(Louis-Philippe)(1773-1850)の娘婿であり、王への影響は必至と考え、いくつかの処置を考える。レオポルドは、もともとドイツ(Coburg)の出身である上、しばしば旅行で国を空け、国内での人気はふるわず、またカトリックや

メッテルニヒ (Metternich) (1773-1859) にすりより、反教権主義者、すなわち自由主義者の反感も強かったため [B, 10, S.332], 革命のベルギーへの波及に恐れおののくことになる。

事実革命はベルギーへと連動した。すでにパリとブリュッセルは鉄道で結ばれていた (1846年開通) ため、革命のニュースは、それまでと違って鉄道の乗客から大量にやってきて、またたく間に伝搬してしまった。ボルン (Born, S.) (1824-98) は、2月24日の夕方鉄道の駅にいて駅の様子を語っている。1848年2月24日夜ブリュッセル駅とパリをつなぐ線のホームに待っていたボルンたちは、やってきた列車の運転士が「ヴァランシエヌ (Valenciennes) の塔の上には赤い旗がなびいているぞ。共和国が宣言されたぞ」と叫ぶのを聞く。そこにかっかりしたような一組のフランス人夫婦がいた。それは、かつてマルクス達のベルギー到着を快く思わなかったフランスのベルギー大使リュミニエール (Rumigny, M. H.) (1784-1871) 夫妻であった [B, 5, S.42]³⁾。

鉄道を通して入った共和国宣言は、たちまちブリュッセルに伝わる。「あらゆる通り、もちろん古い大きな市庁舎広場でのカフェや、ビアハウスは人で埋まり、いたるところでブラバンソヌ (Brabaçonne), マルセイエーズが唄われた」 [B, 5, S.43]。その光景は、これを見たボルンが「今晚にも、ベルギーの若い国王は群衆に撃破されるに違いないと思うことができるはずだ」 [B, 5, S.44] と語るほどのものであった。誰もが共和制を信じて疑いえないほどの盛り上がりを見せたため、ベルギー政府の恐怖は高まる。

革命の知らせと同時に、25日レオポルドは、みずから王位を退き、国民に政治を任せる用意があることを告げる。しかし、これは捨身の戦術で、退位を示すことで、国民の矛先をかわす役目も持っていた。ボルンはこのことについて「新しくできたベルギーの王位にいるのは一人の優秀な官僚であり、彼は彼の舟を転覆の波から冷静に操っている。彼は自由派の内閣でもっとも影響力の強い大臣とブリュッセルの市長、議員を呼び、彼らにこう言った。『国民が私を王に選んだのである。

私は王として常に人民の意志を尊重してきたが、今まで私の政府に対して真面目な批判はまったくなかった。——国が私に委ねた王位を退くことを要求するのなら、逆らうことなくそうしよう』 [B, 5, S.44] と書いている。こうして、これを聞いた議員たちは深く感動し、「共和国万歳」から一転して「国王万歳」を唱えたという。

こうしてはぐらされてしまったベルギーの革命騒ぎは、国王への追及のムードを獲られないままに、26日市庁舎へのデモへと進む。マルクスがその副議長をしていた共和主義者の結社「民主協会」は、デモンストレーションを市庁舎前で行う。

すでに自由派も共和主義への急激な旋回へのムードをそがれていたが、そうした状況をよく理解していない市との間にトラブルが発生していく。市は、民主協会および外国人亡命者たちの集会が武装蜂起につながるものだと考え、かなり厳しい処置をとることになってしまうのである。27日早朝市庁舎では、民主協会を中心とする群衆に取り囲まれ、援軍を必要と考え、軍の出動を要求する (ブリュッセル市長から内務大臣への手紙 [B, 1, S.34])。しかし、この時市民は武装した革命勢力ではなく、ただの丸腰のデモ隊にすぎなかった。軍は、市庁舎を取り巻く群衆に向かって進み、群衆を蹴散らした。この時のことを、ボルンは、こう語っている。「エンゲルスとともにカフェの入口の前の歩道に立っていた。私の右にはヴィルヘルム・ヴォルフ (Wolf, W.) (1809-64) がいた。——突然騎馬隊が彼に迫り、歩道に届くぐらい馬から身を乗り出し、小さなヴォルフの衿を掴み彼を運び去ってしまった」 [B, 5, S.45]⁴⁾。ボルンが突然のことで慌てているうちにヴォルフは逮捕されてしまう。この時逮捕された人物はヴォルフ⁵⁾以外に、アラール (Allard), ダシー (Dassy, Th-J.), ド・トミ (De Thomis, P.) であった。彼らは市庁舎前で見えていた群衆であり、武装した革命家というわけではなかった。こうして、市長は、市民の運動を強権発動によって封じてしまう。この時とった民衆の逮捕、そして外国人の追放は、革命予防の緊急措置としては評価されるであろうが、ベルギー憲法から言うと許しがたい行動であっ

た。

市のこうした行動は勇み足であったと言うほかないであろう。しかも、3月3日のマルクスへの追放令、3月4日の逮捕、彼の妻の逮捕をとってみても、まったくベルギー政府が1830年以降とってきた政策と対照的なやり方であった。一連の処置が、市の責任だけで行われたのか、ベルギー政府も関与していたのかは問題であるが、余りにも過剰に反応してしまったことは事実であった。

もちろん、ベルギー政府は、自国の制度が言葉通り機能していれば、何も慌てる必要はなかったのである。王制打倒という問題を除けば、ベルギーはフランスよりかなり自由であったからである⁽⁶⁾。

スタンジェは、ベルギーで自由が維持できた理由を4つあげている[B, 28, S.158f]。第一は、民主的新聞と民主的同盟の存在である。ベルギー政府は必要な場合、外国人を追放することができたが、その実行を難しくしていたのは、こうした民主勢力のおかげであった。とりわけ、政治的にも発言権をもつ民主組織、民主協会の力は大きなものであった。第二は出版の自由である。ベルギーでは出版への検閲はなく、裁判は陪審員が行うため、12人の陪審員の賛成を得る必要があったため、ほとんど出版への圧力はなかった。第三は、結社の自由である。警察はスパイを送ることはあっても、結社の自由を制限することはなかった。このことは、警察の史料を見ても歴然としている⁽⁷⁾。しかし、逆にこのことは他国のスパイを自由にベルギーに入れることにもなっていたが。第四に郵便検閲室(Cabinet noir)が存在しないことである。ベルギーでは郵便物の自由が守られていたのである⁽⁸⁾。

b. 革命と民主協会

ベルギー政府が厳しい処置をとったのも民主協会、またその廻りを取り巻く、ドイツ人亡命者の組織ドイツ人労働者協会、共産主義者同盟などといった亡命者組織について当局が十分な知識を持ちあわせていなかったことにも原因があった。

民主協会(Association démocratique)は、共産主

義組織ではなく、人民の友愛と連合を旨とする急進的な自由派の組織であった。そこに参加している人々は、フランス人、ポーランド人、ドイツ人などの知識人とともにベルギー政界に力を持つ自由派の人々で、むしろ急進的ブルジョア組織と言ったほうがよい組織であった。特に議長のリュシアン・ジョトラン(Jottrand, L.-P.) (1804-77)、ルイ・ド・ポテ(Louis de Potter, 1786-1859)、シャルル・スピルトルン(Spilthoorn, Ch.-L., 1804-73)、デュペティオー(Dupectiaux, E., 1804-68)などは、1830年のベルギー独立運動に参加した人物で、ベルギー内閣を支える自由党の人物であった。しかし、1847年以後急進派のグループを集めて、新しい組織「民主協会」を結成する[B, 1, S. 11]⁽⁹⁾。

そもそもこの民主協会とマルクスとの関係であるが、従来こうしたブルジョア組織との関係は積極的に評価されてこなかった。それは、エンゲルスがこの協会の設立に不満であったからである(1847年9月28日-30日のマルクス宛の手紙[B, 21, Bd.4, SS.84-92])。彼は、この組織をドイツ人労働者協会の分派組織と考え、マルクスやエンゲルスの参加しない組織が別に設立されることを恐れ、逆にこの組織に消極的に参加することを決意する。民主協会の二人の副議長についてはエンゲルスの画策によって、その座にマルクスが座ることになる。このエンゲルスの脈絡から判断する限り、主体は、ドイツ人労働者協会、民主協会は分派活動を阻止するために入ったという消極的な存在となっている。しかし、実際にはマルクスは、積極的に参加しているのである。マルクスが深く関係していたボルンシュテット(Bornstedt, A.) (1808-51)の『ブリュッセルのドイツ人新聞』には、毎週の例会の案内が載せられる[B, 9]。イギリスの友愛協会、さらに各国の民主主義組織にブリュッセルでの国際会議を持つことを提案する際に、重要な役割を果たすのもマルクスである⁽¹⁰⁾。そしてこの友愛協会は、共産主義同盟とも関係を持っていたわけである。マルクスは、この協会に対しては、啓蒙活動でも協力する(革命の前の1月7日にこの協会のホールで自由貿易(Echange libre)

についての講演をし、革命の頃この講演は冊子となる（「自由貿易問題についての論説」[B, 21, Bd.4]）。

こうした民主派との付き合いは、ケルンの『新ライン新聞』時代でも継続するが、マルクスの本来のブルジョア革命、そしてプロレタリア革命といった二段階革命論に立てば、むしろ至極当然であったと言えるかもしれない。彼はこの民主協会とドイツ人共産主義者との関係について明確な視点を持っていた。民主協会の新聞『デバ・ソシアル』(*Le Débat social*)が、ドイツ共産主義者の階級闘争の視点がユートピア的であり、民主協会との関係を疑問視したことについて、彼は、ドイツの共産主義は社会的基礎にしたがった運動を展開しているのだと主張して(2月13日)、共産主義はあくまでも、階級闘争の面での闘争ではなく、現実の経済発展の中で進展するものにすぎないことを強調する。マルクスは、ドイツの革命はブルジョア革命であり、その限りにおいては、民主派との協調は必要不可欠の条件であると考えていたと言ってもよいであろう¹¹⁰。

2月革命の勃発と同時に民主協会は活動を活性化する。民主協会はフランスに続いて共和制実現のために職人や労働者に武装を呼びかける¹¹¹。この武装の呼びかけは、後のマルクスの妻イエニーの回想に「戦闘準備はいっさい完了した。いまやドイツの労働者が武器を探すときがきたように思われた。あいくち、リヴォルヴァーが調達された。カールはそのために資金を出したかったのだが、ほんのわずか手にいれただけであった。」[B, 22, p. 187]¹¹²と書かれていて、やがてこれがマルクスの武器の購入説を裏付ける史料となる。しかも、3月29日にベルギーとフランス国境の村リスコントゥ (*Risquons-Tous*)で民主協会の一部過激派のスピルトンがフランス側から「ベルギー軍団」(*Légion Belge*)をおくり、ベルギー軍との武力衝突を起こす事件¹¹³がおり、民主協会と武装蜂起、さらには共産主義者と武装蜂起という図式が生まれ、マルクスと武装蜂起型革命の図式が形成される基になってしまうことになる。これは、マルクスの逮捕、追放との絡みで問題にされ、革命家としてのマルクス像をつくることにもなって

いる。

しかし、この一連の事件は、市民が王をその座から引きおろす共和主義革命であり、一部の状況を除けば、武装蜂起はほとんど問題にすらなっていなかった。しかも、民主協会の活動は、当局の矢継ぎ早の処置の前で充分展開ができず、武装蜂起をたとえ考えたとしても、それが実現できる状況にはなく、民主協会の動きは抑えられていた。もともと民主協会は、議会制度を中心とするブルジョア急進派の組織であり、武力闘争を前面に掲げていたわけではない。民主協会の議長ジョトランは、国王と親しく、また3月末に路線武装闘争をするスピルトンでさえ、暴力的革命を期待してはいなかったのである[B, 1, S.92]。マルクスは、それゆえにこの組織に加担していたとも言える。だからマルクスは、当時武装蜂起に賛成したわけでもなく、武器購入をしたわけでもない。そうでなければ、3月5日以降にパリに移ったマルクスが、ヘルヴェークやボルンシュテットの武装蜂起に反対したことと矛盾することになる。しかも、マルクスはすでにブリュッセルを去ることを決意していたのである。マルクスの逮捕、追放は、あくまでも外国人追放の処置の一貫にすぎなかった。この事件について次に述べることにする。

c. マルクス逮捕と追放

マルクスは2月26日に住居をブリュッセル郊外オルレアン (*Orleans*) 通りから、サンテ・ギュデュル (*Ste. Gudule*) 広場ボワ・ソヴァージュ (*Bois Sauvage*) 館に移す転居証明書を警察に届ける[A, 1]¹¹⁴。マルクスは、すでにブリュッセル市内に移る決意をし、かつて滞在したボワ・ソヴァージュ館に滞在する。しかし、その後3月3日までのマルクスの消息ははっきりしていない。アンドレア (*Andreas, B.*) は、詳細な研究の中で、ジョトランの2月29日の民主協会での「マルクスは今日ロンドンへ行き、ボルンシュテットはパリへ行く」[B, 1, S.38]という発言から、マルクスはこの間ロンドンに行っていたのではないかと推論している¹¹⁵。その理由として、『共産党宣言』の原稿と、ロンドンの友愛協会への民主協会の手紙を郵送で

はなく自分でもって行く必要があったからであると主張している。この推論は、興味深い。なぜなら『共産党宣言』は従来の説では遅くとも2月革命前に出版されていたということになっていたからである。それゆえにこそ、2月革命を予告した『共産党宣言』の意義があったのである。この推論によると2月29日にロンドンについてのマルクスは、すぐに原稿を渡し、すぐに組版が作られ、印刷は次の3月1日に出版されたということになる[B, 1, S.91]。しかも、その時はロンドンの共産主義者同盟がブリュッセルへ拠点移動する時であり、印刷のミスと初版の異刷の多さという奇怪さもそのためであったということになる。

3月3日になって初めてマルクスは、ブリュッセルの共産主義者同盟のブリュッセル本部を多くの会員が追放されたためパリに移すことを述べた決議に登場する[B, 8, S.713f]。そしてマルクスはその午後ベルギー政府から追放を受けるのである⁹⁷。この追放は、特別なものではなく、他の外国人に関する追放と同様のものではなかった。追放にあたっては、すでに警察は他のドイツ人を逮捕した際に、マルクスなる人物が大量のお金をおろしたことと武器の購入をからめて、2月28日追放を求める文書が法務省へ出されてはいた(オディから法務大臣への手紙[A, 1, a])。そしてその夜、事件は起こる。

マルクスは、3月2日付けの24時間以内に追放という追放令を受け取り、その夜パリ行きの準備をしていた。深夜2時、ブリュッセル市警察⁹⁸は、ボア・ソヴァージュに乗り込んでくる。そしてボア・ソヴァージュ館を捜査令状もなく家宅搜索し、書類を没収し⁹⁹、逮捕状なくマルクスを逮捕する¹⁰⁰。当惑した妻は、友人の図書館員ジゴ(Gigot, Ph.-Ch.) (1820-1860) のところへ助けを求めに行ったが、そのジゴも逮捕される。深夜に行われたこの逮捕は、まず逮捕令状、捜査令状、深夜の捜査、妻や友人への不当逮捕などといった違法処置だけでなく、警察権力の不当介入の問題も示す大きな事件となる。マルクスが、これほどフランス、ベルギーの新聞で騒がれたのは、前にも後にもないほどのものであった。

イェニーはそのときのことをこう語っている。「深夜二人の男が家に押し入ってきた。二人の男はカールはいるかと聞いた。彼が出て行くと、自分達は警部だと名のってから、カールを逮捕して取調べよという命令書を示した。夜中彼を引き立てて行った。恐ろしい不安にかられた私は、急いで彼の後を追いついた、どういふもくろみなのかを聞くために、有力者を探した。まっくらな夜、家から家へと急いだ。と、だしぬけに夜警が私を取り押さえて逮捕し、暗い留置場におちこんだ。これこそ宿無しの乞食や浮浪人、不幸にも落ちぶれた女達を拘留する所であった。突き飛ばされて暗い小さな部屋に入れられた。しくしく泣きながら部屋に入ると、苦しみをわかちあう不幸な女の人がひとり、私に寝床をあけてくれた。硬い板ばりのベットだった。私はその上にくずれおれた。夜の明ける頃、私は向いの鉄格子の奥に、死人のように青ざめた、あわれな顔を認めた。窓辺によってみると、それは私達の親しくしていた友人ジゴであった。彼は私を見つけると合図をして下の部屋の方を指さした。見るとカールがいたが、ちょうど兵隊に護衛されて行くところであった。——この事件はセンセーションを巻き起こした。新聞はこぞって報道した」[B, 22, p.187f]。

保安警察¹⁰¹は、追放及び逮捕を行うにあたって、すでにかなり下調べをしていた。まず、マルクスの資金の流れを調査していたことである。大量の金を手にいれたマルクスが、武器を購入していたとすると、警察はまずそれを没収しなければならぬ。そのため警察は、ボワ・ソヴァージュ館の聞込みを行っている。彼自身も急進的組織に入っていた家主のラノワ(Lannoy, J.B.)は、3月3日の午前10時に警察に出頭させられ、証言をしている。そこで、マルクスが5、6日前に彼の家に移ってきたこと、銀行から現金を引き出した2月28日月曜日のことを聞かれ、マルクスが何度か外出し、いろんな人物が何人か訪ねて来たことを証言していた[B, 1, S.40]。警察の狙いは、マルクスが武器を大量に購入し、それを労働者に渡したのではないかという嫌疑であった。市警察は、マルクスの逮捕、家宅搜索という手に出る。現に、証

人喚問された職人は、武器を入れる道具を買いに来たものがいたことをあげていたが[B, 1, S. 41]²²⁾、いずれもマルクスに該当する人物ではなかった。

しかし、マルクス家の家宅捜索で武器は出てこなかった。没収されたものは、文書だけで、武器購入を裏付けるものは何一つ発見されなかった。結局、マルクスの現金は、急進組織から武器購入のために渡された資金ではなく、母ヘンリエッテ(Henriette, Marx) (1788-1863) から父の遺産としてオランダのリオン・フィリップス(Philips, L.) (1794-1866) を通じて送られてきた彼自身の金であり、しかも、その資金は、武器購入に当てられたのでもなかったのだ。

このマルクスとその妻に対する逮捕が、法務省、保安警察によるものであったかどうかはその後のマルクスの新聞紙上でのベルギー批判にも関わってくる。法律上、深夜の家宅捜索、外国人の逮捕状なき逮捕は禁じられているはずであった。マルクスはベルギー政府への批判としてこの事件を利用することになるが、この問題は微妙である。革命勃発から、政治警察が、外国人の監視と、武器の購入に関心を持ったのは事実であるが、それ以上に市の警察は、民主協会及び外国人を恐れていた。市の警察は特に集会を監視しており、マルクスのいたボワ・ソヴァージュ館は、集会が開かれる場所でもあったのである。武器の購入経路、そして外国人、そして集会という3者が一致したと考えられた点で、市警察による違法とも思える逮捕が起きたのであった。

マルクスも妻も、逮捕のあと審問をうけるが、ここでの内容は、武器の購入であったと思われる。イエニーの回想のように武器を購入したとすれば、すぐに釈放ということにはならなかったであろう。民主協会のテデスコ(Tedesco, V.-A.) (1822-97) は武装蜂起を企てたため、何度も逮捕され、最終的には死刑判決を受ける²³⁾。マルクスは実際、武器購入には一切関係していなかったし、実際家宅捜索でも共産主義者同盟の文書以外には何も見つからなかったのだ、拘留延長は考えられなかったであろう。

マルクスは、3月4日午後市警察の留置場から

釈放され、裁判所で審問され、釈放される。そして、4時頃保安警察で通行証を取得する(バヴェー(Bavay)のオディへの連絡[A, 1, a])。釈放と同時に追放令によってベルギーを去らねばならなくなる。ヴォルフは護送車でキエヴラン(Quievrain)に送られたが、マルクスの場合自らブリュッセル南駅からパリ行き²⁴⁾の列車に乗ったものと思われる。保安警察長官オディ(Hody, L.) (1807-80)宛の書簡には「彼は今晚フランスへ出発する予定です。キエヴラン経由で」[A, 1, a]と書かれてある。マルクスはキエヴランまでの通行証(Feuille de route)を受けとるのでそこまで行ったことだけは確かである²⁵⁾。ブリュッセルを出る列車は、パリ直通が午後6時半とキエヴラン行き午後4時45分しかない。マルクスは、一人でパリへ向かったのではなく、フェルディナント・ヴォルフ(Wolff, F.) (1812-95)と一緒にいるのであるが²⁶⁾、その際彼との連絡の必要性が列車に影響したとも考えられる。3月3日に待ち合わせの連絡をしたとしても、突然の逮捕があり、3月4日に再度連絡の必要性があった²⁷⁾。とすると、4日の列車に乗れなかった可能性もある。とすれば、3月5日朝ブリュッセルを出発して、パリに夜着いたことであろう²⁸⁾。すべて都合よくいったとして4日のパリ行きの列車に乗ることも可能である。しかしいずれにしても5日にパリに着くことは可能である²⁹⁾。

妻イエニーと子供達はマルクスと一緒にではなかった。マルクスは、4日午後保安警察で妻に3日間の滞在猶予の保証を要求する。しかし、イエニーには追放令が出ていないので本来必要はなかった。オディは3月8日にイエニーと子供達がブリュッセルを後にしたかどうかを聞いており[A, 1, a]、11日に3月4日に出発したことを告げる文書が届けられている。しかし、ボルンは、「私はマルクスの夫人とその子供達とパリへ向かった」[B, 5, S. 49]と言っているのだ、奇妙なことになる。なぜなら、ボルンは、当局の報告では3月6日に出発したことになっているからである[B, 1, S. 115]。イエニー自身は「パリへ、パリへ行くのだ。私はとるものもとりあえず、身の廻りの品を

かき集め、売れるものは売り払ったが、私の銀製品と比較的よい下着類を入れたスーツケースはブリュッセルに残して、本屋のフォークラー (Vogler, C.G.) に保管してもらった。この人は私の出発に際して、とくに骨をおってくれたのである。こうして3年住んだブリュッセルを後にした。とても陰気な寒い日で2月も晦日の日であった」[22, p.188]と書いている。彼女はブリュッセルへ郊外から来た日と、パリへ出発した日を間違えたのであろうか、まったく辻妻のあわない道を述べている。

2. パリへの追放

a. パリへの到着

マルクスは3月5日にパリへ到着する⁹⁹。パリでは、共産主義者同盟の本部を開設する。イギリスから議長シャパー (Schapper, K.) (1812-70) も駆けつけ、マルクスも書記として会議が行われる。やがてマルクスは、ここで武装闘争をかかげるヘルヴェーク (Herwegh, G.) (1817-75) とボルンシュテットと対立する。マルクスとエンゲルスの当時の立場をもっとも表現しているのは、「ドイツにおける共産党の要求」である、ここではドイツの共和制、21歳以上の選挙権、被選挙権、民兵、農民の封建的負担の解放、私的銀行の廃止と国立銀行の創設、交通機関を国有化、政教分離、累進課税、国立作業場の創設、無料国民教育をあげ、農民、プロレタリアート、小ブルジョアの利益をを図る政策を出す [B, 21, Bd.5, 4f]。この政策は、『共産党宣言』で書かれた、共産主義革命の政策とはまったく異なり、ブルジョア革命の政策である。しかも、この政策にはプロレタリアートだけでなく、農民、小ジョアジーといった層も参加するわけで、『共産党宣言』の4節にかかげてある民主グループとの協調といった路線である。

こうしたマルクスとエンゲルスの思想は、ブリュッセル時代から一貫したものであった。革命と武装蜂起への批判、民主協会との協調などそれである。そこには経済的下部構造の発展とブルジョア革命の必要性が前提されており、資本の文

明化作用としての民主主義社会といったものが前提されていた。しかし、共産主義者同盟全体がこの路線に協調したかどうかは、その後の展開でわかるように微妙である。共産主義者同盟の中心にいたシャパーやヴィリッヒ (Willich, A.) (1810-78) などのグループはプロの革命家であり、秘密結社の人間である。秘密結社の公開と、民主主義路線は彼らの権力の衰退につながることは必至であった。最初に路線問題で衝突するのは、シャパーたち中心とではなく、パリのドイツ人民主協会を代表するヘルヴェーク、ボルンシュテット⁹⁹とであった。

彼らは、ベルギーの民主協会の過激派と同じように武装組織を結成し、ドイツに帰って革命を遂行することを考えていた。パリの共産主義者同盟が戦ったのは、民主主義者の中の暴力闘争であった。まずマルクスにとって彼らの欠陥は、資本主義の歴史的展開を踏まえない暴力闘争にあった。3月29日ベルギー国境リスコントウでのテデスコたちによる武装蜂起は、パリのベルギー軍団によるもので、いわばドイツ民主協会の組織ドイツ軍団と類似したものであった。大量の検挙者と死刑判決を出したこの事件のためにブリュッセルの民主協会は3月末には完全に消滅することになる。結局パリのドイツ人民主協会もベルギー軍団と同じく、破滅への道を歩む。やがて4000人の軍団をともなってドイツへ進み、ドムスバッハ (Domsbach) で決定的な敗北を受け、ドイツでの影響力を失う。

マルクスの一貫した考えは、非暴力主義的民主派路線との協調であったし、共産主義者同盟も徹底した非暴力主義を貫くことであった。ところが、彼がブリュッセルで武器を大量買付けし、そのために捕まったというイエニーの説は、民主協会の暴力派との協調を示すことになり、パリでのマルクスの活動と完全に矛盾することになるのである。マルクスは、こうした嫌疑を晴らすべく、ベルギーでの事件に対するベルギー政府の処置を批判する。

b. マルクスのベルギー政府批判

マルクスの逮捕について、最初に問題にしたのは、ベルギーの民主協会のジョトランであった。3月5日の『デバ・ソシアル』で「マルクスは——警察の侮辱の犠牲となった。一人の警視と五人の警察官が金曜から土曜にかけての午前1時に自宅に逮捕しにやって来た。マルクス博士は妻とまだ幼い子供達と一緒におり、何の理由もなく家族から彼を引き離したのだ」[B, 1, S.47]と批判的記事を書く。この騒ぎについてボルンは、「次の朝カール・マルクスの逮捕はすぐに知れ渡った。私は急いで彼の家に行き、そこで夫人が涙を流しながら昨夜の状態について話してくれた」[B, 5, S.47]と述べていてこのニュースがすぐに広まったことがわかる。もっともイエニーはすでに逮捕されているので、これは釈放後のことではないかと思われる。

ジョトランは、さらに民主協会の集会でもこのことをとりあげ、『レマンシバシオン』(*L'Emancipation*, 3月7日)にリュブリナー(Lubliner, O.L.) (1809-69) がそのことを記事に書いた。「追放令が執行する夜2時に7区の副警視を先頭とする何人かの警察官がサンテ・ギュデュルSt. Gildoulのマルクス博士の自宅に現れ、妻や子childrenのことを配慮せず、ペルマナンス(Permanance) (7区警察署, Petit Sablon), アミーゴ(Amigo) (市役所裏の拘置所)へ連れて行った。マルクス夫人は、泣きながら家主をともなって真夜中ジョトラン氏のところに行った。3時に彼女が戻って来ると家の敷居のところthresholdに一人の警察官がいて、夫のところへ連れて行こうと誘った。彼女は偶然道で出会った夫の友人とともに警官の後をついて行った。しかし、警察署に着いて最初に答えねばならなかった質問は身分証identity cardを持っているかどうかであった。はっきり言って、こんな時に持っているはずはなかった。彼女はその瞬間に浮浪者として、取り扱われ、最低の生活をしている女性とともに朝まで拘置所に入れられることになった」[B, 1, S.50]。この民主協会でのジョトランの発言は、エンゲルスも知っていて、マルクスに「日曜の晩(5日)、ジョトランが君と奥さんとのことを民主協会Democratic Associationで話した。僕は遅れて

行ったので、聞きそこなった」[B, 21, Bd.27, S.115]と語っている。そして、民主協会の反応について「こちらでは弁護士達が憤慨している。マインツ(Maynz, K.G.) (1812-82) は家宅侵入やその他の理由で事件を告訴すべきで、君が原告になるべきだ、と言っている。——事件は大きなセンセーションを引き起こした」[B, 21, Bd.27, S.115] (1848年3月9日)。

マルクス自身も、この問題についてすぐにフロコン編集の『レフォルム』(*Réforme*)に批判の記事を書く(3月8日)⁹⁹。「3月3日、午後5時、ベルギー王国を24時間以内に退去せよとの令状を渡されて、私が、同夜、旅行の準備に忙殺されているところへ、一人の警視が十人の市警を連れて私の住居に踏み込んできて、家中をくまなく探し、挙げ句の果て、私を旅券不所持のかどで逮捕した。——私が逮捕された直後、私の妻はベルギーの民主協会の議長ジョトラン氏のところへ出かけて行って、必要な処置を講ずるという約束を取り付けた。妻が帰宅したところ、戸口に一人の警官が立っていて、マルクス氏に話したいことがあるのであれば、自分の後について来なさいとえらく丁寧な言葉で言った。そこで妻は二つ返事で申し出に応じた。そこで妻は警察署に連れていかれたのだが、警視は開口一番、マルクスはここにはいないといい、ついでに乱暴な口調で、おまえは何者か、ジョトラン氏のところへ何をしに行ったのかと聞き、また妻が旅券を所持しているかどうか、と聞いた。私の妻について一緒に警察まで来てくれたベルギーの民主主義者ジゴ氏が警視の理不尽で無礼な質問に抗議したところ、市警どもによって口を塞がれ、ひっとらえられて、豚箱hog boxにほうりこまれてしまった。妻の方は、浮浪罪ということで市庁舎の刑務所へ連れていかれ、売春婦と一緒に薄暗い房に入れられてしまった。翌朝11時、白昼一隊の憲兵に護送されて予審判事室に連れていかれた。ほうぼうから猛烈な非難が殺到していたにもかかわらず、妻は2時間も独房に監禁されたままであった」[B, 21, Bd.4, S., 537]。マルクスは、大量の亡命者を受け入れたベルギーの民主制に潜む反動性の例示としてこの問題を取り上げている

のだが、その根底には民主主義運動を繰り広げていたドイツ人やベルギーの民主主義者への弾圧に対する鋭い批判があった。この点から考えても、マルクスが武装蜂起を企んでいたとは思えない。

この記事は、すぐにベルギー各地の新聞に転載された（『リエージュのリベラル』(*Liberal Liégeois*) (10日), 『ガン・低地通信』(*Message de Gand et Pays-bas*) (10日), 『立憲連合』(*Union constitutionnelle*) (10日) [B, 1, S. 121]）。エンゲルスも、マルクスの記事が書かれるよりも早く、しかし発表は遅く、イギリスの『ノーザン・スター』(*Northern Star*) にこの問題について書いていた（3月25日）。「金曜日の夕方、特にマルクス博士は、24時間以内に退去せよとの命令を受けた。彼が旅行鞆を整理していた最中、午前1時に、しかも日没から日の出までの間は市民の住居に侵入することが法律によって禁じられているにもかかわらず、一人の警視に率いられた十人の武装警官が彼の家に押し入り、彼を取り押さえて市庁舎の監獄へ連行した。彼の旅券が規則に違反しているということ以外に、なんら理由は示されなかった。彼が少なくとも3通の旅券を提示したにもかかわらず、しかも彼はブリュッセルに3年間住んでいたにもかかわらずだ！」[B, 21, Bd. 4, S. 533f]。エンゲルスは、マルクス同様に彼の妻やジゴのことに言及し、ベルギーが誇りにしている自由の実態がどんなものであるかをイギリスの読者に語りかける。「新聞が言っているように、この国にとっては、フランス共和国を少しも羨むことはないのだ」[B, 21, Bd. 4, S. 535]。

マルクスのフランスでの記事、ベルギーでのその転載、そしてイギリスでのエンゲルスの記事は、ベルギー政府の行動を国際的舞台に引き出すことになった。こうしたことができる背景には、マルクスやエンゲルスの、ベルギーの民主協会というブルジョア組織への参加と、彼らの交遊者に有力者がいたことがあげられる。特に、ドイツ人たちは、ブリュッセルで民主協会の戦略と同様に、冷静で平和的な大衆行動を行っていた。そのため、法的に何の問題もなかったはずである。また民主協会の議長ジョトランは、弁護士であり、

かつ有力な政治家でもあった。こうしたことが彼らの批判の力を大きくしたのである。

こうした世論の動きで、批判を受けた政府は、この問題の調査をし、何等かの処罰をせざるをえなくなる。3月7日にすでにオディはブリュッセルの市警察に対して、マルクスとイエニーの逮捕に関する詳しい状況を調べてくれるよう命令する。「とりわけ、この外国人の逮捕の動機、逮捕場所、それを行った人物、問題の逮捕状について私に知らせてください」（オディから市警察ファン・ベルセル (Van Bersel) への手紙) [A, 1, a]。こうして内部の調査が行われる。

ブリュッセル市警のファンハウヴ (Vanhouw, F.) 警視は次のように報告する。「11時頃外国人たちは15人、サント・ギュデュルのボワ・ソヴァージュ館に戻っていった——。零時を過ぎ、鐘が鳴った後で、エイエ (Heye) 巡査が彼らがボア・ソヴァージュに集まっていて、大騒ぎをし、扇動的な言葉をはいているという事実を報告しにやってきた。——ダクスベック (Daxbeck, G.) の到着と同時に、ひとりの女性を除いてみんなばらばらに散った。一方彼らの中の一人マルクス氏はキャバレーに残っていた。彼は身分証明書を見せ、それを戻しながら、本能的にポーランド語とドイツ語の書類を副警視からすぐに暴力的に奪い取ろうとした。しかし、それを取り戻したが、それは後に共産主義者への一般的要求⁹⁹ということが確認された。ダクスベックはマルクスの抵抗があったにもかかわらず、とうとうそれを差し押さえた。彼は、マルクスの行ったこの行動と状況からして、彼及びその仲間の一味だった妻をとりあえず逮捕する必要があると考えた。彼女は、世間的名声によって外国人の政治的行動へ積極的に参加し、ドイツ人クラブで行った講演でも名をあげてさえた。」[B, 1, S. 56]

この報告によると、マルクス逮捕は、その夜の労働者の集会と、その首謀者であるマルクスの持つ不審な書類によるもので、不当な逮捕ではないということになる。妻の逮捕理由も浮浪者としてではなく、謀議活動の参加者ということである。妻に関してはさらに「警察がキャバレーに入った

際逃げた彼の妻は、この点からも怪しまれ、さらに彼女が夫の極端な急進主義への参与者として知られていたことによって、すぐにその後チューレンベルク (Tuerenburg) 通りで逮捕された——拘置所に入れられたのは浮浪者としてではない」(3月8日) [A, 1, a] と述べているので、市警は最初から政治的謀議と考えていたことになる。それが真実ならば、深夜の搜索は、謀議活動の現行犯逮捕であり、深夜寝静まった民家を急襲した不当逮捕ではないということになる。ファンハウヴは、マルクスの主張には誇張があるとして、自己の正当性を主張する。市警が、謀議活動を恐れ、集会を監視していた事実は、謀議活動と武装蜂起への可能性を市警がもっとも懸念していたことによってわかる。

とすると、市警の説明は、保安警察の説明(武器取引にからむ嫌疑と滞在証明の不備)とは違うことになる。そこでこの両警察の矛盾は、たんに複数の警察制度を持つベルギーにおいて起こり得た偶然の相違だったのかどうかの問題となる。

マルクスは、3月12日の『レフォルム』で、この一連の逮捕は、偶然の逮捕ではなく、仕組まれた計画的逮捕であり、市警と保安警察は一貫した連携をもっていただと考えている。「レオポルド王の政府は、公共の秩序を乱すものとして政府が同夜のうちに検挙すべきものと判断された人物のリストを、すっかり用意していた。それには、警察署長オディ氏によって、このリストの中に若干の外国人を、でっちあげられた謀議事件を扇動した中心人物として書き加えるのが適当であった。そうすれば確信的な共和主義者として知られたベルギー人たちの逮捕も隠すことができるし、国民の不安をかき立てることもできた」[B, 21, Bd. 4, S. 539]。

しかし、保安警察と市警との捜査の方法(保安警察は、武器の購入と追放という線、市警は謀議活動の現行犯逮捕)では連携が取れているとは思えない。確かにヴォルフやアラールのように数日の拘留後追放された事実があるが、それとマルクスやボンシュテットなどの場合が同じとは言えない。マルクスの事件がベルギーへの国際非難を巻き起こ

したのは事実としても、ベルギーの政府が計画の上ですべてを行っていたのかということ、その点も二つの警察の連携の不備からみて、曖昧なのである。マルクスはフランス臨時政府の近隣諸国へのプロパガンダ政策との兼ね合いもあって、ベルギーの見せかけの自由を主張するが、ベルギーはこの問題に関して、国王も配慮し[A, 1, a]、さらに国会でも、ブリュッセル市議会でも論議されるのである。

自由派の代議士ブリクール (Bricourt J.-J.) (1805-57) は、マインツとジョトランの要求もあって、3月11日法務大臣への質問を要求する⁶⁴。この質問の骨子は、市警察の主張と違いマルクスと妻の逮捕は正当な権利で暮らしている住民への不当逮捕であるというもので、マルクスの主張に沿っていた。もっとも、彼は妻が警察署で衣服を破られるほどの乱暴を受けたこと[B, 1, S. 64]と、金銭支払いによって途中で半が変わったことなどを付加し、普通の市民への虐待を一層際立たせていた。そして「我々が自由な憲法をまさに誇る時に、このような事実は、その言葉を裏切っていますし、一人の外国人に、非常に自由なはずのわがベルギーでは、上級警察、下級警察が、正義、道徳、法を大胆にも、罪を受けずに踏みこむ手段をもってののだと感じさせているのです」[B, 1, S. 64]と主張する。国会での論議は、ベルギー憲法の尊厳にかかっているということであった。そこで主張されたのは、住居不法侵入、逮捕状なきマルクスとその妻の逮捕、ジゴの任意逮捕であった。これに対し答えた法務大臣は、追放は別として、逮捕はブリュッセル市警のやったことで政府は一切知らず、もし本当ならばそれは不当逮捕であると答える[B, 1, S. 66]。大臣の解答は、問題はブリュッセル市警の単独犯行で、政府は一切関係していないというものであった。

3月11日のブリュッセル市議会でもこの問題を取り上げられる。弁護士のバルテルが質問に立って、この問題について3人の調査委員会をつくるよう要請する。市長は、委員会の設立には反対しないが、逮捕は公共の場であるキャバレーで起きたもので、不当ではないと答える。市長側は、

あくまで逮捕はキャバレーと集会との関連で行われたのであり、政府との関係はないと主張する。政府の新聞『モニトゥール・ベルジュ』(*Moniteur Belge*)も、政府の見解としてマルクスの逮捕は監視下にあったキャバレーで起こったことであり、当然であり、またブリュッセル市民でないマルクス夫妻に滞在証明を求め、もっていなかったマルクス夫妻を逮捕するのも当然であり、妻への処置も特別室を与えるという配慮もしていることを述べ、この問題はなんら問題とすべきでないことを主張する(3月12日)[B, 1, S. 71]。

これに対して、エンゲルスとジョトラン、フェデ(Faider, A. V.)は、政府がマルクスの主張を故意にねじ曲げていることを『デバ・ソシアル』、『レマンシパシオン』(3月21日)で批判する。二つの記事は基本的には同じで、ボワ・ソヴァージュはキャバレーではなく、食堂にすぎないということ、部屋に侵入した時明りがあり、集会が開かれたというのは嘘で、誰もおらず真っ暗であったのが真実であること、マルクスはすでに2月26日からブリュッセル市民であったこと、マルクスは滞在証明書は持っていなかったというのは間違いで、滞在届けを出していたこと、マルクスの妻が特別室に入ったのは夜が明けてのことで、ひどい待遇を受けていたこと[B, 1, SS. 74-79]に焦点を当てていた。基本的論点は、あくまでこの事件は偶然起こったのではなく、政府の陰謀によるものであったということであった。

c. その後の処理と政府の監視

マルクスの逮捕をめぐる問題は、最終的には、市警察官の罷免という形で落ち着く。市の委員会の報告は4月1日市議会議員ブルケール(Brouk-ere, Ch.) (1796-1860)によって行われる。調査委員会は、委員会を要求したバルテル(Bartels, J.-Th.) (1820-62)、市長を含む7人で構成されていた。それによると、ファンハウヴ警視の命令で集会の監視を行っていたが、その日はボア・ソヴァージュで集会が開かれるらしいという噂を聞き、それを追ったが、夜遅く迄明りがついていたので、警視に頼んで捜索を行った。しかし、それ

はすべて間違いであった。第一にそこにいたのは、集会に参加した人物ではなく、マルクスに別れを言いに来た人物であったこと、第二に集会に使われていた部屋はマルクスの部屋ではなかったことである。しかも、副警視ダクスベックが入ったこの屋敷はキャバレーではなく、レストランであり、しかもその時すでに明りは消えていて、マルクスは起きていたが、妻子は寝ていた。またマルクスは、追放令をもって滞在証は不要であったこと、妻の滞在についても浮浪者として追及できる状況にはなかったこと、ジゴも滞在許可証を持っていたことによっても、ダクスベックの逮捕は性急であった。妻イエニーの処遇についても売春婦と同じ拘置所に入れたことは事実で、特別室でベットを与えたといっても、そこは、暴力行為で捕まった女性と一緒に部屋であった[B, 1, SS. 83ff]。以上の誤認捜査、誤認逮捕により、委員会は、副警視ダクスベックの罷免を求めることになった⁹⁵。

この報告書は4月1日になされているのであるが、エンゲルスのマルクス宛の3月9日のものとされている手紙の中で、すでにエンゲルスは「君の所に行った副警視はすでに免職になっているようだ」[B, 16, S. 135]と書いている。市長がまだ市警の行動に不審をもっていなかった時期に罷免をするというのはおかしいし、これはマルクスが『レフォルム』に書いた翌日である。したがってこの手紙の日付はもっと後にずれ込む可能性もある。しかし、エンゲルスは3月20日ごろパリへ行っている(3月22日のフォークラーからマルクスへの手紙[B, 16, S. 408])、その間であろう。とすると、罷免については3月半ばに出たのではないだろうか。

結局この判決では、政府の策謀については何の証明もできず、市警、それも一副警視の偶然のミスによる罷免という結論になってしまった。しかし、これを政府による策謀隠しとすることも単純には言えないであろう。当時の市警と保安警察との間に十分な連携があったとは思えないからである。おそらく、保安警察が追放する人物を、市警が別件で逮捕してしまったという判断もまんざら

間違いとも言えないのである。市にとっての最大の問題は集会と謀議、保安警察にとっては武器の大量購入であり、おのずと捜査方針は違っていたのである。

さてその武器購入の問題であるが、保安警察はその後も資金ルートを追っているのである。3月6日には、6000フランの小切手がマルクス宛に振り出されていることを掴んでいる[B, 1, S.51]。しかも、それが民主協会のスピルトルンなどと関係していることも掴んでいた[A, 1, a]。しかし、問題はこの資金の出所と使い道である。出所について、3月12日保安警察はトリーアへ調査依頼を出し、それが母の送金によるものだということを知る（この点で見る限り、武器購入の公的資金でないことはわかっている）[B, 1, S.73]。しかし、このお金の使い道は最後まで保安警察も掴めてはいない。それは、最初から保安警察はマルクスが武装蜂起を考える過激派だという視点で見ているからであった。その後のマルクスに対する見方は変わっていない。保安警察は、パリで武装蜂起を企図しているボルンシュテットの活動を調査し、マルクスについても追っていて、『新ライン新聞』と謀議活動、危険な活動家ブルーン（Bruhn, K.）（1808-?）やシュラム（Schramm, C.）（1822-58）とマルクスとの関係も調査している[A, 1, a]。実際には、マルクスはこうした動きとはまったく違った動きをしているのである。

しかし、もしこれだけのお金がマルクスにあったのなら、マルクスの金銭問題は明るかったのであろう⁹⁶。なるほど、フォーグラールからの借金や1847年末までであった借金や金銭的切迫が減少している。逆にブライアー（Breyer, F. A.）（1812-76）や、ジゴ、ヘス（Hess, M.）（1812-75）、マインツなどへ金を貸してもいる[B, 21, Bd. 27, S.118]。また、急な引越でフォーグラールに預けた銀の食器などの財産も、借金の片となるのではなく、再びマルクスのもとに帰ってくることになる。いずれにしろ、マルクスは、この時信じられないくらいのお金運に恵まれていたのである。したがって、彼が、6000フランのお金を武器購入に費やしたとは考えられない。

結 語

以上の状況から見て、マルクスが2月革命の時期に武器を購入して武装蜂起を企てようとしたという従来の指摘は容認しがたい。その点から見る限り、保安警察の捜査は空振りであったと思われる。保安警察の陰謀がそこにあったのかという問題も、捜査が金銭関係を克明に追っていることからしても考えられそうにない。保安警察の行ったマルクスの追放も、危険な外国人の追放という一連の流れの中でのことであり、マルクスへの陰謀ではない。それでは保安警察は直接手を出さず、市警によってマルクスと妻の逮捕の陰謀を企んだのかというと、この点も後の委員会報告が示しているように、可能性は少ないであろう。可能性があるとするれば、逮捕によってベルギー政府がマルクスの武器購入の事実を突き止めるということだが、武器の搜索を指揮した形跡はない。市警の捜査は、案外勝手に行われたのかもしれない。

マルクスは、この逮捕の中で、自らは民主的運動家で、謀議を起こす人間ではないということを主張し、ベルギー政府がそうした民主主義者を取り締まることの違法性を追及していたが、これは逆にマルクスの当時の立場を表していたとも言えよう。保安警察はマルクスの主張とは別に、マルクスを危険人物と思ってはいたし、その意味で言えば、逮捕するべきであったのは、ボルンシュテットのような武装蜂起派であったであろう。しかし、ベルギー政府は彼に対してはたんに追放の処置しかとってないのである。このあたりの処置にベルギー政府の反動性を見いだすのは、困難である。むしろ、ベルギー政府は、こうした状態の中で意外に権力は分散しており、一貫した陰謀などを行う状況になかったとも言えよう。

注

- (1) マルクスのパリからの追放については、拙稿[33]を参照のこと。
- (2) ゲムコー（Gemkow）編集の『カール・マルクス伝』は「数日前父の遺産からかなりの金を受け取っていたマルクスは、ブリュッセルの労働者の武装のために数千フランを寄付した。彼はその際妻の完全な同意も得ていた。彼の妻は数年間

- のひどい窮乏の後だけにやっと物質的に保証されることに希望を抱いたが、個人的利益を革命運動の利益に従属させることを一瞬もためらわなかった。」[B, 21, p.114]と書かれている。またマルクス年譜には、「マルクスは、ブリュッセルにおける共産主義者の武装蜂起の準備に積極的に参加し、ブリュッセルの労働者を武装させるために多額の資金を供与する」[B, 14, p.62]とある。これらの文面からすると、マルクスは武装闘争を支援したかのように思われる。また、クリームも「ベルギーの労働者や、民主主義者はフランスの2月革命の例に対抗しようと武器をとった」[B, 16, S.196]と書いているが、少なくともブリュッセルにおいて武器を使った市街戦は行われなかった。唯一例外は、3月末の国境でのベルギー軍団の侵入である[B, 24, 130-138][B, 10, SS.331-343]。
- (3) 当時パリとブリュッセルとを結ぶ鉄道は、ブリュッセル南鉄道駅発パリ行き、午前8時15分、午後6時30分の2本、パリ発ブリュッセル行き、午前8時、午後8時、ブリュッセル発キエヴラン行き午前8時15分、12時30分、午後4時45分、キエヴラン発ブリュッセル行き午前5時15分、6時15分、11時、午後2時45分、4時15分、5時(1848年2月6日『ブリュッセルのドイツ人新聞』[B, 9])といった具合であった。パリを出た列車がブリュッセルへ到着するには13時間かかったので、ボルンが待った列車は24日の朝8時に出て21時ブリュッセルに到着する列車ではなく、国境からやってくるキエヴラン発の列車であったのであろう。
- (4) ヴォルフの逮捕についてマルクスはメモにこう書いている。「2月27日日曜日、夜10時から11時の間。市庁舎でのまぎれもない暴行、八方からげんこつ。まぎれもない暴行は、まず酔っぱらった市民軍の大勢いる市庁舎警察署で。警官がげんこつでヴォルフの右目をうったので、ヴォルフは視力回復が困難になる」[B, 21, Bd.4, S.610]。エンゲルスもこの駅でのことを「ノーザン・スター」への記事で書いている。ボルンの言葉と少し違っている。「その日の夕方には、興奮と不安がこの町を覆った。あらゆる種類の噂がまき散らされたが、なに一つ信用されなかった。鉄道の駅は、ニュースの到着をきざわしく待つあらゆる階級でいっぱいだった。フランス大使リュミニエ侯爵もそこにいた。夜の12時半、木曜日の革命のすばらしいニュースを携えて列車が到着し、全群衆は熱狂して突然いっせいに叫んだ—「共和国万歳！」」[B, 21, Bd.4, S.531]
- (5) ヴォルフは警察での取調べで、短刀を所持していたことになっている。おそらく警察が仕組んだものと思われる[B, 1, S.145]。
- (6) 「政治的亡命者は多くの国民が羨むようなわが憲法によって保証された発言の自由、結社の自由を大いに利用していた」[B, 6, p.590]
- (7) ボルンシュテットやマルクスに関する史料には、政治結社に関するものはない。逆にそのため、ベルギーでのマルクス等の活動についてはプロイセン側の史料を中心に考えねばならず、研究の幅が狭められる結果となっている([B, 27]参照)。これと同様のことはロンドンについても言えることである。
- (8) スタンジェは、この例証にジゴをあげている。彼はアルシーヴに勤めながら、マルクスの共産主義通信委員会で手紙を書いていたが、その事実を警察に察知されなかったのである[B, 28, S.158]。ただし、彼はマルクスの逮捕と共に逮捕されるが。
- (9) ベルギーの自由急進派は、最初「アリアンス」(Alliance)そして「自由協会」(Association libre)そして「民主協会」

といった形で組織を再編成している[B, 1, p.23][B, 3, p.23]。その中心には、ブリュッセル自由大学の知識人がおり、その中のドイツ人教授マインツはマルクスと懇意であった。

- (10) 「同時に私はこの旅行を利用して、ブリュッセル民主主義協会とイギリスのチャーチストとの連絡をつけ」と書いている[B, 21, Bd.27, S.472]。民主協会とマルクスとの交遊については[B, 18]参照。
- (11) 「共産主義者たちはいたるところで、すべての国の民主主義的党派の結合と協調のためにはたらく。」『共産党宣言』[B, 21, Bd.4, S.493]。エンゲルスもこう言っている。「われわれはブルジョアジーの友人ではない。これは周知の事実である。しかしわれわれは彼らに、このたびは、彼らの勝利を与えるのだ。彼らが、とくにドイツにおいて、民主主義者と共産主義者の一見小さな集団を見下している。その横柄な眼差しを、われわれは平然として見ていることができる。」[B, 21, Bd.4, S.502]
- (12) 民主協会は、市長へ市民軍の組織化と、それへの市民の参加を呼びかけたが、武装蜂起は呼びかけなかった[B, 21, Bd.4, S.621]。しかし、これは誤解を生むことになった。
- (13) もしイエニーの文言とおりであったとすれば、マルクスはもっと拘留されていたかもしれない。イエニーの回想は1956年に初めて出版されたものであり、アンドレアによるとイエニーは1853年出版された*Erklärung*を利用した不正確なものだという[B, S.13]。当局は、革命の連絡を受け、すぐに(26日)武器の販売を禁止しているので、マルクスが武器を購入したとは考えにくい。警察の捜査でも武器は出てこなかった。
- (14) リスコントゥについてエンゲルスは、「アントワープの死刑判決」の中で言及している。「誰もがリスコントゥの事件を知っている。ベルギー人の労働者が共和派の祖国侵入を企てて、パリに集まった。ベルギー人の民主主義者がブリュッセルからやってきて、この企てを支持した。ルドリュエーロランが、できるかぎりこれを促進した」[B, 21, Bd.5, S.380]
- (15) この転居証明は、ブリュッセルにはなく、トリーアのカール・マルクス・ハウスにある。マルクスのブリュッセルでの住居は以下の通りである。ブリュッセルには、転居届けが警察史料として残っている。パリでは、同種の史料がパリ・コミューンによる警察署の史料消失で不明である[B, 2, SS.240-243]。
- 1845年2月9日 ホテル・ザックス(Saxe)(暫定パスポートを持った滞在者リスト)
- 1845年2月19日
警察での面接の連絡住所
プチ・サブロン(Petit Sablon)街24番
- 1845年3月13日まで(一ヶ月住む)
ボワ・ソヴァージュ(転居届け)
- 1845年3月13日から5月3日
パシェコ(Pacheco)通り35番(転居届け)
- 1845年5月3日から1846年5月7日
アリアンス(Alliance)通り5番(St. Josse-ten-Noode)
(ドイツ人の多い地域[B, 26, S.21])
- この地区はサンテ・ギュデュル教会の墓があったり、ウルセル(Ursei)公の領地があった地区である。(人口8400人[B, 29, p.49f])
- 1846年5月7日から10月19日
ボワ・ソヴァージュ館(転居届け)
- 1846年10月19日から1848年2月26日(転居届け)

- オルレアン通り, 42, イゼール (Ixelles)
イゼールは、当時「役人、芸術家、名士のすまいがある」[B, 29, p. 51]とされたところで(人口7500人[B, 29, p. 49]), ドイツ人の人口も高かった ([B, 26, S. 21])
- (16) 当時ロンドンとブリュッセルの間の所要時間は、オステンデまで鉄道で5時間、海峡が4(-)5時間、ドーヴァーからロンドンまで4時間、合計13(-)15時間であり、朝7時の列車に乗れば、夜には充分着けることになる[B, 14, S. 454]。
- (17) 追放令は、すでに2月27日(ヴォルフ)、2月28日(パウエル・ド・トミ、ヘルマン・コップ (Kopp, H.)), フェリックス・スーニコラ・アラール)、2月29日(ボルンシュテット)、3月2日(マルクス、マチアス・マッティ (Marti, M)), フリードリヒ・クリューガー (Krueger, F.)) が追放されていた。追放令には1835年9月22日の法にしがって公共秩序に不安を与えたというものであった。
- (18) ベルギーの警察は、次のように分かれていた。ベルギー警察 (Gendarmérie), 市民警察, 軍, 保安警察。ベルギー警察は当初市民警察 (Garde Civique) や軍 (Arme) に比べて治安維持の機能をもたず、組織的には軍の指揮下にあった。治安の際に力を持つのが軍で、軍は外国の敵だけでなく、国内の敵に対しても威力を示した。革命に際して、まず動いたのが軍であったのは、当然であった[B, 23, pp. 29-36]。市民警察 (Police civil) は、ブルジョアを中心とする組織で、市長の指揮下にあった。
- (19) 押収文書について、ヴェルムートとシュティーバーの報告書にも掲載されている[B, 30, Bd. 2, S. 80]。この文書[B, 21, Bd. 4, S. 607]は、本部をパリに移すことしか書かれてない。もっとも当時の共産主義者同盟の文書に武装蜂起を探ることはきわめて難しい。
- (20) マルクスのブリュッセルでの追放、逮捕に関する研究でもっとも詳細なものは、アンドレアの文献[B, 1]である。これは、各地のアルヒーフの資料集となっている。同種のものとしては、ブリュッセルの警察側の史料を集めたのがヴォテルス[31]の文献である。また最初に史料を見たのは、フェルトマン[B, 11]で、その後ビエラル[B, 24], バイン[B, 4]が見ているが、その後いくつかの史料が散逸している。
- (21) 秘密警察として、保安警察 (Sûreté Publique) があった。この警察は、刑務所、パスポート、輸送などの管理にあたった。この警察こそ、外国人を対象とするもので、よほどのことがないと追放はできないものの、追放も可能な警察であった[B, 23, 43ff]。1840年にオディがその長官に座って以来、要注意外国人を記録していた。マルクスの史料を見ると革命前は、亡命最初の史料と、転居証明だけであるが、追放以後の史料は多いことに気付く。
- (22) さらに警察は、42ターレルの手形を交換したフランス語のできない人物のことをやかん職人が証言している[B, 1, S. 112]。
- (23) 「立憲的ベルギー国家は、その制度の優秀さを示す新しいりっぱな例を提供した。リスコントット村のばかばかしい事件がきっかけとなった17名の死刑判決がそれである。若干の無分別者、希望にうつつをぬかした若干の痴人が、憤み深いベルギー国民の立憲制というマントのはしを少しあげようと試みて、これに無礼を働いたので、その報復のため、17名に死刑を判決したのだ。何という野蛮か!」[アントワープの死刑判決][B, 21, S. 378]
- (24) マルクスがフランスに入れた理由はフロコンの許可証ということがこれまでの通説であるが、日付から言うてもあやしい。マルクスと同じくフランスから追放されたボルンシュテットはマルクスより早く(2月29日)[A, 1, a]追放されていたが、フランスへの侵入は問題なかったようである。したがって、マルクスもこの時点で、フロコンの受け入れ許可を受けていた可能性はない。その後のエンゲルスを通じたフロコンとの関係で書かれたものかもしれない。それは特にベルギー政府への批判の『レフォルム』のマルクスの記事と関係しているのかもしれない。
- (25) 1848年4月30日ヴォルフからジョトランへの手紙[B, 1, S. 115]
- (26) マルクスはすでにプロイセン国籍を失っているのに、パスポートを持たないで通行するということになり、「有効なパスポートを携帯しないものは、ベルギー通行を許可されない」[a, 1, a]という法令に触れることになった。
- (27) ヴォルフ, F. はブリュッセルから離れたところに住んでいた(現在のWoluwe-St. Etienne)。とすれば、マルクスの逮捕の連絡、マルクスとの連絡にかなり不便であったと思われる。アンドレアスは、この点を明確にしていない[B, 1, S. 115]。
- (28) パリとブリュッセル間が朝8時に出る直通で結ばれており、28時間かかっていたのに比べるとかなりの短縮になっていた[B, 7, p. 35]。
- (29) 『ロンドンのドイツ人新聞』(1848年3月10日号)に、3月6日のパリのドイツ人民主義者の集会にマルクスも参加していたことが伝えられているので、遅くとも6日まではパリに来たと思われる[B, 8, S. 715]。
- (30) 2年前までならパリまでは2日かかっていたであろう。マルクスのパリの住居[B, 13, SS. 204-209]
郵便住所
ボーマルシェ (Beaumarchais) 通り 75番
『レフォルム』編集所ジャン・ジャック・ルソー (Jean-Jacques-Rousseau) 通り 3番
ラ・ヴィクトワール (La Victoire) 通り 19番
3月5日から15日
ヌーヴ・メニルモンタン (Neuve Menilmontant) 通り 10番 (現在のコミューン (Commune) 通り)
3月15日から4月6日まで
グラモン通り (Grammont) 1番ホテル、マンチェスター (Manchester)
- (31) ボルンシュテットに関する警察報告は、2月29日に追放令を受けたことを記録している。その後のフランスでの行動の追跡も行われており、ヘルヴェークと武装集団をつくり、メス、バーゼル、コルマル、ナンジーでドイツ人を4000人集結させていることも擲んでいる[A, 1, b]。
- (32) この逮捕に関する批判記事は、孫のロンゲによって最初に全文公開された[B, 19, p. 19ff]。マルクスのフランス受け入れは、事後的に3月10日に行われる。従来この受け入れは3月1日と言われていたが、新メガにその写真が掲載されている。どう見ても3月10日と記されているが、新メガは強引に従来通り3月1日としている[B, 16, S. 389]。この史料が最初に発表されたのは、マルクス自身の作品『フォークト氏』[B, 21, Bd. S. 676]であった。そこで3月1日と書いてあるので、それをただ踏襲しただけなのであろう。この点について、すでにアンドレアも指摘している[B, 1, S. 95]。
- (33) ここで言われている言葉は Un appel général aux communistes であり、共産主義者同盟本部をパリに移転するという決議を指すのか不明である。これはケルン共産主義者の「人民の要求」(3月3日)かもしれない。しかし、3月21日から30日の間に書かれたものであるとされている「ドイツ

におけるドイツ共産党の諸要求」とも表題が似ている。

- (34) 国会での論議は3月12日の『エマンシパシオン』や3月14日の『ケルン新聞』(*Koelnische Zeitung*)、『アルゲマイネツァイツング』(*Allgemeine Zeitung*, Augsbourg)にも掲載される[B, I, S. 128]。
 (35) 保安警察のオディと検事局長バヴェーは、その後1869年の銀行スキャンダルで追及され罷免されることになる[B, I, S, 21f]。
 (36) マルクスの金銭問題については、[拙著 B, 32]5章を参照。

引用文献

引用は以下の番号によって示される。例[B, I, p. 1]は、Bの文献1のページ1を意味する。

A. アルシーヴ史料

- (1) Archives générales du royaume, Bruxelles
 a. Sûreté Publique No. 73946 Karl Marx
 b. Sûreté Publique No. 74101 Bornstedt

B. 文献史料

- (1) Andreas, Bert, *Marx 'Verhaftung und Ausweisung Brüssel, Februar, /März, 1848*, Schriften aus den Karl Marx Haus, Nr. 22, 1978.
 (2) Andreas, B., Grandjone, J. et Pelger, H., Karl Marx' Ausweisung aus Paris und die Niederlassung von Marx und Friedrich Engels in Brüssel im Frühjahr 1845, *Studien zu Marx' erstem Paris-Aufenthalt und zur Entstehung der Deutschen Ideologie*, Schriften aus dem Karl Marx-Haus, Nr. 43, 1990.
 (3) Bartier, J., Le Mouvement démocratique à l'université libre de Bruxelles au temps de ses fondateurs, *Socialisme*, Nr. 37, Nr. 38, Bruxelles, 1960.
 (4) Basy, Th., L'Arrestation de Karl Marx à Bruxelles le 4 mars 1848, *La Revue Générale*, Bruxelles, 15, Sept., 1928.
 (5) Basy, Th., Karl Marx à Bruxelles, "1845-1848", *La Revue Générale*, Bruxelles, 15, Novembre, 1927.
 (6) De Bertier de Sauvigny, G., *La France et les Français vus par les voyageurs américains 1814-1848*, Paris, 1982.
 (7) *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, Berlin, 1983.
 (8) *Deutsche-Brüsseler-Zeitung*, hrsg. Bornstedt, 1847-48.
 (9) Dunck, H., *Der Deutsche Vormärz und Belgien 1830/48*, Wiesbaden, 1966.
 (10) Feldmann, W., Aus Karl Marxens Wanderjahren, *März*, III, 2, Mai Heft, München, 19
 (11) Gemkow, H., *Karl Marx. Eine Biographie*, Berlin, 1967. 『カール・マルクス』坂井信義訳, 大月書店, 1973年
 (12) Grandjone, J., Zu Marx' Aufenthalt in Paris; 12 Oktober 1843-1, Februar 1845., *Studien zu Marx' erstem Paris-Aufenthalt und zur Entstehung der Deutschen Ideologie*, Schriften aus dem Karl Marx Haus, Nr. 43, 1990.
 (13) Jahn, C. F., *Illustriertes Reisebuch*, Berlin, 1850.
 (14) *Karl Marx. Chronik seines Lebens in Einzeldaten*. Zusammenestellt vom Marx Engels-Lenin-Institut, Moskau, 1934. 『マルクス年譜』岡崎次郎, 渡辺寛訳, 1960年
 (15) *Karl Marx Friedrich Engels Briefwechsel Gesamtausgabe*

(*MEGA*), Bd. III/2., Berlin, 1979.

- (16) Kliem, Manfred, *Karl Marx. Dokumente seines Lebens 1818 bis 1883*, Leipzig, 1970.
 (17) Kuypers, Jullien, Freundeskreis (1845-48) : Einige Notizen aus Belgischen Archiven, *International review of social history*, 1962.
 (18) Longuet, Ch., *La Politique internationale du marxisme, Karl Marx et la France*, Paris, 1918.
 (19) Ludwig, B., Ein Urteil über Marx und Engels aus dem Vormärz, *Der Kampf*, Bd. 12, Wien, 1919.
 (20) *Marx-Engels-Werke*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin 『マルクス・エンゲルス著作集』監訳 大内兵衛, 細川嘉六, 大月書店
 (21) Marx, Jenny, Kurze Umriss eines bewegten Lebens, *Mohr und General, Erinnerungen an Marx und Engels*, 1964. 「波乱万丈のスケッチ」『モールと将軍1』栗原祐訳, 国民文庫, 大月書店, 1976年
 (22) Van Outrive, L., Cartuyvels, Y., Ponsaers, P., *Les Polices en Belgique, histoires socio-politique du système policier de 1794 à nos jours*, Bruxelles, 1991.
 (23) Piérard, Louis, Karl Marx à Bruxelles, *Europe Nouvelle*, 4, Oct. Paris, 1924.
 (24) Pirenne, H., *Histoire de Belgique de la révolution de 1830 à la guerre de 1914*, Bruxelles, 1932.
 (25) Sartorius, F., Die Politische, wirtschaftliche und soziale Tätigkeit der Deutschen in Brüssel 1842 bis 1850, *Die frühsozialistischer Bünde in der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Ein Tagesbericht*, Berlin, 1975.
 (26) Schlechte, H., Karl Marx und sein Wirkungskreis in Brussel. Dokumente aus belgischen Archiven, *Beiträge zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, Bd., 1, 1966.
 (27) Stengers, J., Die Bedingungen für eine sozialistische Betätigung der Deutschen in Brüssel, *Die frühsozialistischer Bünde in der Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Ein Tagesbericht*, Berlin, 1975.
 (28) Wauters, Al., *Les Délices de la Belgique, ou description historique pittoresque et monumentale de ce royaume*, Bruxelles, 1844.
 (29) Wermuth-Stieber, *Die Communisten-Verschwörungen des Neunzehnten Jahrhunderts*, Berlin, 1853, Reprint, 1969.
 (30) Wouters, H., *Documenten betreffende de Geschiedenis der Arbeidersbeweging 1831-1853*, 3 Bde, Löwen / Paris, 1963.
 (31) 拙著『トリーアの社会史』, 未来社, 1986年
 (32) 拙稿「マルクスのパリからの追放」『経済貿易研究』18号, 1992年

(本稿作成には、以下の機関の史料を利用させていただいた。記して謝意を表したい。ベルギーの王国アルシーヴ、王立アルベール1世図書館、一橋大学社会科学古典史料センター、専修大学図書館。本稿は、1987年科学研究費奨励研究(A)、1989年、1990年東京造形大学研究費(C)、1991年度神奈川大学海外出張費の成果の一部である)